甲府に行く道にて　東牧羊

百千歳かはらぬ不二の大み山
汝よ鏡よやまとごゝろの

鶯

湯川たき子

あさぼらけ野邊の鶯梅が枝に
よをこめてなく聲ぞにほへる

菫

あれはてしかきねのすみれ匂ふなり
摘みて歸らむ春のかたみに

フレーベル會俳句端書集

一、課題　春季雜吟　一人十句以下
一、締切　二月二十五日限り
一、披露　明治卅八年四月發行本誌文苑欄
一、賞品　天地人三座には美景を呈す
一、撰者　當分本會の撰とす
一、投稿　本誌購讀者は何人にても投吟する事を得用紙は繪葉書に限り（眞筆刷物隨意）住所氏名雅號を明記し必らず左の名宛にて送らるべし。

埼玉縣入間郡芳野村
フレーベル會俳句掛
鹽野奇零宛

第七回俳句端書集

明ける夜に氷を叩く隣かな　長野飯塚曉震
夜や寒み燈火くらさ木賃宿　仝
霜置く煙る焚火の普請小屋　仝
沈沒の檣悽し冬の月　仙台立花一瓢

凩や浮雲そらにも柿一とつ　同
積む槇木も園の中や冬籠り　同　花村曙山
月の雪人住む世とは思はれぬ　陸奥
山の端に殘んの月や霜の橋　同
冬の日や今日も曇りて夕暮る〳〵　同
袴着や養ひ君の大人振り　東京　藤置ゆかり子
大雪も初めはちらり〳〵かな　本所區　久米辰子
匿名で呼ぶ落胤や榾の宿　同
思ひなやむ人の愚や大三十日　同
入口も落葉にふかき在所かな　武藏　月田一甫
牛吼る聲にも見ゆる師走かな　小石川區　平岩學洋
寐返りの度毎に知る霜夜かな　同
大佛の鼻の穴にも氷柱かな　同
大雪の朝や山根に立つ煙　常陸　落花庵
今少しはしき師走の日脚哉　同

風呂吹や坊が自慢の味噌加減　越後　正木靜江
から風の上に冴けり峰の月　豐前　金子琴月
嬲られて眠りも醒ず晝の木兎　同
うれ殘る豆腐の桶やうす氷　甲斐　野口豐雪
寒垢離の心貫く姿かな　同
河豚汁や胡座かゝねば味も出ぜ　下野　秋山春水
待朝は空ばかり見る時雨かな　同
解けかゝる氷の上や殘る鴨　岩代　荒木柳江
兎狩りて麓に來れば小雪かな　大和　津谷柏山
穴熊の出でゝ打たるゝ吹雪かな　淺見秋夢
鰒と無酒病の人の病ひかな　同
凩や夜明に高き月一とつ　東京　久保狂水
市ひけて人聲もなし冬の月　上總　高橋波月
炭一駄賣りて師走の用意哉　同
さぎ一羽時雨て戻る芦間かな　上野　加藤よし

まだ咲かぬ梅の下掃く冬至かな　同

暮知らで居るか雪野の夕烏　相模樂山人

提灯に別れて廣ー雪の道　遠江西村三省

風の子の交りて寒き炬燵かな　信州今井一舟

水涸て漁村の柳まばらなり　芝區井上きよ子

三光

天、氷る夜や路次へ消え行く下駄の音　藤置ゆかり子

地、遠征の身の思はるゝ寒さかな　月田一甫

人、佛今桶へ入れたり鐘氷る　久米たつ子

追加　無一庵奇零

いつも〳〵悔てすごしぬ年の暮

辻店の今川燒や夜の寒さ

寒き夜や九尺二間の手内職

道すがらの感

久保やま子

私は日本内地で度外視せられて居ります九州の西南陲、日向の國に居る者で御座いまして何も存じませんから、唯雜誌や會報で僅に皆樣の御安否を承りましたり御旅行日記や御秀逸を向ふが唯一の快樂なので有ります、隔年位には必ず出京も致しますが、ほんのある一部の御方々を御訪問申位、何か年來の御禮としてお土産もがなと存ますが、扨田舍は土嗅き御談ばかり皆樣の御耳を煩す樣な事は更にないので困りました、

扨此度の出京は少し例外の道を撰擇びまして土々呂と申小港より神戸には參りませんで豐后地に上陸迂廻して筑前筑後地に入寄り所用を便じまして東上の途に就き九鐵より山陽線東海線と移り〳〵